

## 『黄帝内経』における“夢”診断

劉 園 英 \*

Diagnosis of Dream in 『Yellow Emperor's Internal Classic』

Yuan Ying LIU \*

Received October 25, 1997

## I. はじめに

夢が心理活動の一つの形式である以上は、人間が覚醒時に経験した事柄、思考の問題および感受された驚恐、憤怒などの精神的刺激は、すべて夢の中に反映される可能性がある。これは即ち、フロイトの言う「昼間思うところがあれば、夜間その夢をみる」ということである。しかしこれだけではなく、夢は時に覚醒時の精神活動の総合と継続でもある。多くの著名な学者と発明家が睡眠中の夢に啓示されて難問を解決したとの記載（ユング）がある。

このように神秘ではかり知れない夢について、中国伝統医学では人の生理活動によって影響を受けると考え、人間の陰陽の消長の変化に従った探求を試みている。

西洋文化が中国にもたらされる近代以前、中国は独自の思考方法によって夢を探り、西洋には見られない独特の理論と類型とを生み出してきた。例えば、『黄帝内経』（こうていだいけい）の「淫邪発夢」「脈要精微論」「方盛衰論」などの説、『周礼』の提起した「六夢」（りくむ）の説、『列子』（れっし）の中の「情化往復」（極度に何かを恐れて心配すれば、それは往々にして夢となって現れる）の説など。これらはみな西洋の夢理論とは異なるものである。

中国伝統医学は夢の生理的な基盤を極めて重視する上に、臨床的実践の要求に基づいて、生理・病理と言う面から夢の原因とメカニズムを探った。『黄帝内経』に比較的まとまった形で記されている夢の分析はその代表である。近年本格的に精神医学などの領域で扱われるようになった夢が『黄帝内経』の如き古医書にかくも詳細に論じられていることは驚嘆に値する。本稿では、『黄帝内経』における情動と身体・疾病の関わり、精神疾病の病理認識などを解明するため、精神現象である夢に対する認識を取り上げ、『黄帝内経』における夢理論・夢診断についての検討を行った。

---

\*薬学部  
Faculty of Pharmaceutical Sciences

## II. 夢の認識

古来、夢は洋の東西を問わず、神のお告げの人間への介入などと云われた。近代科学の進歩あるいは合理主義の考え方からは、夢にそのような神的意義を認めなくなり、夢は日常生活に全く関係のない幻想であると認識している。二十世紀になってから、フロイト、アドラー、ユングなどが、夢を取り上げて、夢の意義が活発に議論されるようになった。近代西洋の心理学者フロイト（1856～1939、オーストリアの心理学者・精神医学者、主著『夢診断』『精神分析入門』）は夢は過去に抑圧されて意識下に埋没された欲望が、ある時に意識に上ってくるもので、深層心理にかくされていた意識下のものの表出である、即ち夢は記憶の再生であると指摘した。アドラー（1870～1937、オーストリアの精神科医）は夢の背景にある内容を、過去の性的願望の現われとするフロイトの考えに納得せず、むしろ将来の展望を含む権力的願望が抑圧されていると考えた。ユング（1875～1961、スイスの心理学者・精神医学者、主著『人間と象徴』『子どもの夢』）は夢の中に神話的内容を認め、フロイトの抑圧された過去の願望の表現であり、またアドラーの未来指向型との、両説を肯定しながらも、夢は古今東西、人類発生以来、人間に存在する「普遍的・無意識」の表出であると指摘した。

『説文解字』<sup>1)</sup>での夢文字の解釈は「寐而有覚也」ということである。中国伝統医学では、夢は特殊な精神活動であり、臓腑気血、営衛の運行と密接な関係を有すると考えている。従って夢の内容は、単に人間の心理活動の反映であると言うだけでなく、人間の生理活動と病理活動の反映でもある。人体の生理的要求、即ち本能的欲望は夢の中で表現される。例えば、『素問・脈要精微論』<sup>2)</sup>に述べられている「甚だしく飢うれば則ち取ることを夢み、甚だしく飽けば則ち予うることを夢みる」という説は、この類の夢に属する。人体の臓腑組織の病変も、夢の中に反映される。これは『靈樞・淫邪發夢』の中で論じられている「邪気に犯されて夢を發する」という理論である。

## III. 『黄帝内経』における夢理論・夢診断との関係篇

『黄帝内経』は中国伝統医学の最大の影響を与えている医学経典である。その成立時期は、おおよそ戦国時代から前漢始めまでとされる。『黄帝内経』は『素問』（そもん）と『靈樞』（れいすう）の二つの部分からなるが、この二つにはいずれも夢の生理的・病理的原因の問題を考察した部分がある。『素問』と『靈樞』は各二十四卷、八十一篇。その内四篇に夢理論・夢診断に関する論がなされている。

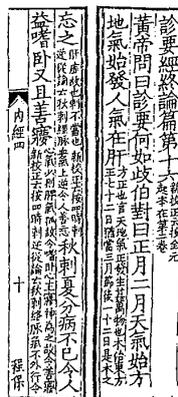
『素問』と『靈樞』全文の夢理論・夢診断と関連する篇数や夢の字句を抽出すると次の表になる。なお底本としては『素問・靈樞』<sup>3)</sup>（日本経絡学会、1992年）と『黄帝内経』<sup>4)</sup>（四川科学技術出版社、1995年）を使用した。

## “夢”と関連する篇・字句－『黄帝内经』

		素問	靈枢	
篇数	3篇	16：診要經終論（1字） 17：脈要精微論（11字） 80：方盛衰論（10字）	1篇	43：淫邪發夢（28字）
字数		22	28	

『素問』・『靈枢』中、夢に関する内容が含まれる篇は「(43) 淫邪發夢」(『靈枢』)「(16) 診要經終論」(『素問』)「(17) 脈要精微論」(『素問』)「(80) 方盛衰論」(『素問』)の四篇で、夢の字句は五十字(『素問』は二十二字、『靈枢』は二十八字)が認められる。その中では、「(43) 淫邪發夢」篇が中国伝統医学では夢の生理病理を論述した最古の専門篇であるとされている。夢の字句は「(16) 診要經終論」(『素問』)「(17) 脈要精微論」(『素問』)「(80) 方盛衰論」(『素問』)篇より多いことが認められる。『靈枢』の中に夢に関する篇は、『素問』ほど多くないが、夢の専門篇として夢の成因、夢の病態などを詳しく記載されている。次に『素問』・『靈枢』中、夢理論・夢診断に関する条文を分析する。

## ① 『素問・診要經終論』篇第十六



「…秋刺夏分，病不已。令人益嗜臥又且善寤。」

『黄帝内经』では「夢」字の初登場<sup>5)</sup>が本篇である。「寤」は夢の異体字である。

『素問・診要經終論』篇では、鍼刺の方法を用いて病を治すにあたっては、四時の気候の変化が人体と密接な関係を持っていると認識すると共に、鍼刺の方法を運用するとき、四時の気候の変化に適応する必要もあると強調した。春夏秋冬、各季節には、それぞれに適した刺法があり、治療の法則に違反した場合、本来の病気が治癒しないばかりでなく、悪化する場合もある。経文によれば、「秋に夏の部位を刺鍼すると、心気を傷ります。病は治癒せず、心気が傷られて火が土を生じなくなり、かえってよく臥すようになり、心は神を蔵せず、多く夢を見るようになる。」<sup>2)</sup>と論述している。そこでの夢は治療原則を違反する結果として推論した病症であると考えられている。

② 『素問・脈要精微論』篇第十七

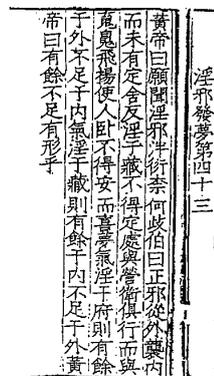


「陰盛則夢涉大水恐懼，陽盛則夢大火燔灼，陰陽俱盛則夢相殺毀傷。上盛則夢飛，下盛則夢墜，甚飽則夢予，甚飢則夢取。肝氣盛則夢怒，肺氣盛則夢哭。短虫多則夢聚衆，長虫多則夢相擊毀傷。」

『素問・脈要精微論』篇には比較的まとまった夢と疾病の関係が論じられている。「陰盛になるとときには、即ち夢に大水を涉り、恐懼す。陽盛になるとときには、則ち大火燔灼するを夢みる。陰陽俱に盛なるときには、夢に相殺毀傷す。上盛になるとときには、飛ぶを夢み、下盛になるとときには夢に墜つる。甚だ飽けば則ち夢にて予え、甚だ飢ゆるとくには夢にて取る。肝氣盛になるとときには、即ち夢に怒る。短虫多きときは夢に衆あつまり、長虫多ければ、即ち、相撃ち毀傷するなり。」。これらは身体の陰陽・上下の気や、肺氣・肝氣が盛んになったとき、飢餓・飽食状態のとき、長虫・短虫（寄生虫）の多いときなど、十一種の場合に病人が見る夢の記述であり、陰-水、陽-火、上-飛、下-墜といった同類の連想や、肝-怒、肺-哭（悲）という五行配当に基づく、比較的素朴な考え方で異なった夢の病態が記載されている。

③ 『靈樞・淫邪發夢』篇第四十三

『靈樞・淫邪發夢』篇は、夢の生理的メカニズムを分析した現存する中国最古の專論であり、前漢以前における中国伝統医学の夢理論・夢診断が集中的に反映されていると言える。本篇には夢の成因、夢の分類などが記されている。「淫邪發夢」篇には三つの段階に分けて夢の成因が論られている。



「正邪從外襲内，而未有定舍，反淫于藏，不得定處，与營衛俱行，而与魂魄飛揚，使人臥不得安而喜夢。……」。

(1) 「正邪外より内を襲い、而して未だ定舎有らず」

これは主に、眠っている時に外界の要素が肉体に弱い刺激を与えるという段階を指す。つまり、眠っている時は、外界からの刺激に対して精神の準備がなく、自覚のないままに刺激を受ける。それは、睡眠中においては体内の防御機能が極度に低下していることが原因であると考えられる。夢の発生全プロセスの中で考えれば、この段階は主に夢を誘発する外部の自然条件を提供する<sup>5)</sup>のものであると言える。

(2) 「正邪反って臓に淫す。定処を得ざれば、営衛と俱に行く」。

外界からの刺激が体内でどのような生理的活動となるかという段階である。外部の刺激が体の表面部（皮膚・皮下組織）から内部（臓腑組織）に及び、臓腑に影響を与えることを意味する。それらの正邪は臓腑の活動を乱して「定処を得ず」、その結果、人体の正常な営衛の気に混入して体中を巡るのである。

(3) 正気は営衛を乱し「而して魂魄と与に飛揚し、人をして臥して安んじて夢を喜ぶを得ざらしむ」。

それに伴って魂魄が飛揚（落ち着かず）して、精神が安定しないため、睡眠時に安眠できず、よく夢が現れると述べている。

中国伝統医学の体系においては、営衛の気が乱されると、魂魄<sup>6)</sup>（精神活動に属する）は五臓から「飛揚」（五臓の中に本来蔵していた精気が五臓を離れるという）せざるを得なくなるのである。

④ 『素問・方盛衰論』篇第八十



「…肺氣虚、則使人夢見白物、見人斬血藉藉。得其時、則夢見兵戰。腎氣虚、則使人夢見舟船溺人。得其時、則夢伏水中、若有畏恐。肝氣虚、則夢見菌香生草。得其時、則夢伏樹下不敢起。……」。

『素問・方盛衰論』篇には五臓各々が虚した場合にみる夢の種類が記されている。「肺気が虚になると、白くて悲しく痛ましいものを夢みさせ、或いはまた人が殺されて、血が流れてばらばらに乱れていることを夢みさせる。肺気が盛んな時に当たると、戦争を夢みる。腎気が虚になると、船が人を溺れさせ殺すのを夢みさせる。腎気が盛んな時に当たると、水中にひそんでいる夢をみたり、恐ろしいことに逢ったような事を夢みる。肝気が虚になると、菌香や草木を夢みさせる。肝気が盛んな時に当たると、樹下に伏して起き上がろうとしない夢をみる。心気が虚になると、火事を救ったり、太陽とか雷電とかを夢みさせる。心気が盛んな時に当たると、大火事で焼かれる夢をみる。脾気が虚になると、飲食物が足りない夢をみ、脾気が盛んな

時に当たると、垣や家を作る夢をみる。……」。本篇は、五臓の盛衰両面における夢の内容を表わしている文章である。

#### IV. 夢の成因

夢の成因について、大脳生理学者は、色々の説を成している。夢は過去の記憶の集まりだと言う人もいる。そして、夢は間脳の網様体の昂奮によると言う人もいる。夢はレム睡眠期にアセチルコリンの分泌が多く、副交感神経の昂奮に夢を見ると言う人もいる<sup>7)</sup>。古代中国の学者たちは、夢の生成に生理的・病理的な原因と、精神的・心理的な原因とがあることについては早くから認識していた。『靈樞・淫邪發夢』篇には、夢が発現するのは、「体内を侵襲した邪気が一定の所に留まらず、あちこちをさまようときに、榮衛二気が邪気と一緒に流れて、それに伴って魂魄が飛揚して精神が安定しない」ためだと、述べている。かかる夢の病理機序の説明が、一種の病症であると同時に、疾病の診断における手がかりともされているのである。

即ち、夢の生成は体内の原因と体外の原因からなる。体外は各種外界からの刺激を指す。体内は精神的な内部からの刺激を指す。後世医家張景岳（張介賓 1563～1640 明代の医学者）は『靈樞・淫邪發夢』篇に述べられている夢の成因の基礎の上に、精神の調和の乱れにより夢を起こすもう一つの原因を提出した<sup>8)</sup>。

#### V. 『黄帝内経』における夢理論・夢診断の特徴

『黄帝内経』に現われる夢理論・夢診断は現代心理学と異り、中国伝統医学の生理・病理などの基礎理論に基づく夢を論述している。主に四つの特徴があると考えられる。

##### ① 陰陽の盛衰

『黄帝内経』では、唯物的な形神統一観念から出発して、陰陽の理論を運用して夢を解釈している。「陰盛なるときは、則ち大水を涉りて恐懼するを夢みる。陽盛なるときは、則ち大火燔灼するを夢みる。陰陽俱に盛なるときは、則ち相殺毀傷することを夢みる。」という経文は陰陽の盛衰によって異なる夢が現れることを論じている。即ち、陰陽の盛衰が異なればそれに対応して夢も異なるという見方である。



「陰氣盛則夢涉大水而恐懼，陽氣盛則夢大火而燔灼，陰陽俱盛則夢相殺。……」

## ② 五臓の虚実

『黄帝内经』は五臓の気の盛衰虚実による夢について論じている。夢の感ずるところが主に「五臓の気の変化」によることを認めている。一方では、特定の夢は特定の臓の状態を示す要素であり、また一方では、特定の夢は特定の臓から生み出されると考えている。『黄帝内经』の夢を分析すれば、五臓の変化にはおおそ二つの類型がある。一つは臓の気の「有余」（ゆうよ：過剰）、つまり機能があまりに盛んであるという場合（五臓の実）である。例えば、『靈枢・淫邪發夢』と『素問・脈要精微論』の「肝気が盛んであると大いに怒った夢をみ、心気が盛んであると喜び楽しむ夢をみ、脾気が盛んであると歌い舞う夢をみ、肺気が盛んであると悲しんで大声をあげて泣く夢をみ、腎気が盛んであると腰にけだるいような痛いような不快な感じと背中が痛む夢をみる。」という経文は五臓の気の盛実状態によって異なる夢が現れることを論じている。もう一つは臓の気の「不足」、つまり機能が衰退しているという場合（五臓の虚）である。例えば、『素問・方盛衰論』の「肝気が虚になると草木を夢み、心気が虚になると山の火煙を夢み、脾気が虚になると飲食物が足らずに腹が空いた夢をみ、肺気が虚になると銃刀類の夢をみ、腎気が虚になると水に溺れた夢をみる。」という経文は五臓の気の不足状態によって異なる夢が現れることを論じている。即ち、五臓の状態が夢の内容を決定するのであって、五臓の状態が異なれば、それに対応して夢も異なるという見方である。

## ③ 五行の配当

『黄帝内经』の夢についての論述には、古代中国哲学である「五行説」（木・火・土・金・水）の影響が強く認められる。前記の『素問・方盛衰論』は五臓の盛衰が各々「其の時を得」た場合の夢がどのようなものとなるか分析していたが、これも「五行説」によるものである。確かに、時が夢に与える影響、夢と時との関係に注目した点には、若干の合理性がある。もし本当に春は木を夢にみて、夏は火を夢にみて、秋は金を夢にみて、冬は水を夢にみるのなら、複雑な夢の原因や内容を非常に簡潔に説明することができる。しかし、一つの季節でも、その期間は非常に長く、外界の自然と周囲の人事も不断に変化しているから、常にその夢をみるとは限らない。

④ 病位の上下

淫邪發夢第四十三

帝曰有餘不足有形乎岐伯曰陰氣盛則夢大水而恐陽氣盛則夢大火而燔煖陰陽俱盛則夢相殺上風則夢飛下甚則夢墮風飢則夢取甚飽則夢予肝氣盛則夢怒肺氣盛則夢愁懼哭泣飛揚心氣盛則夢善笑恐長脾氣盛則夢歌樂身體重不舉腎氣盛則夢腰脊兩解不屬凡此十二盛者至而寫之立已厥氣客于心則夢見丘山煙火客于肺則夢飛揚見金鐵之奇物客于肝則夢山林樹木客于脾則夢見丘陵大澤墮屋風雨客于腎則夢臨淵沒居水中客于膀胱則夢遊行客于胃則夢飲食客于大腸則夢田野客于小腸則夢聚邑衝衛客于膽則夢訟自刎客于陰器則夢接內客于項則夢斬首客于脛則夢行走而不能前及居深地窮死中客于股肱則夢禮節拜起客于胞腫則夢溲便凡此十五不足者至而補之立已也

「上盛則夢飛，下盛則夢墜」，「甚飢則夢取，甚飽則夢予。」（『靈樞・淫邪發夢』）  
 「厥氣……客于膀胱則夢遊行，客于胃則夢飲食，客于大腸則夢田野，客于小腸則夢聚邑衝衛，客于胆則夢鬪訟自刎，客于陰器則夢接內，……。」

『黄帝内経』は夢と病変の部位との関係があると強調している。『靈樞・淫邪發夢』篇では、邪氣が前陰部（生殖器）に宿ると、性交の夢を見る；邪氣が頸部に宿ると、首を斬られる夢を見る；邪氣が脛部に宿ると、前進しようと思ってもどうして足が進まぬ夢を見る；邪氣が手足に宿ると、礼拝したり、立ったりする夢を見る；邪氣が膀胱と直腸に宿ると、大小便をする夢を見ると論じている。『素問・脈要精微論』篇の中には「人体の上部の邪氣が盛んなときは、空を飛ぶ夢をみる；人体の下部の邪氣が盛んなときは、深いところに落ちて打僕する夢を見る」の論もなされている。

これらの内容は我々が弁夢測病（夢を弁証して病気を推測する）の根拠としているものである。

VI. 夢診断の臨床意義

中国伝統医学では夢を疾病に関わる症状の一つであると考えている。夢の症状とそのほかのさまざまな症状とに基づいて、疾病の診断を行うのである。中国伝統医学理論によれば、夢の内容と五臓の状態とは密接な関係がある。夢は自ずから病気の状況の指標となり、内科の疾病については、重要な意義を持っているとされている。

『黄帝内経』が生理的・病理的方面から夢の原因とメカニズムを分析する上に、比較的まとまった夢と疾病の関係を論じている箇所がある。『靈樞・淫邪發夢』において、夢について論ずる目的は主に臨床診断と治療への活用であったから、夢と五臓との関係についての分析は比較的精緻であった。

『靈樞・淫邪發夢』篇と、『素問・脈要精微論』の一段の文章（夢の内容）が五臓の気の盛んな際の夢について論じた文章とは、大同小異であることが分かるであろう。『靈樞・淫邪發夢』篇は五臓の状態から直接夢の内容を説明しているが、『素問・脈要精微論』篇は、まず脈の状態から内臓の状態を説明し、そしてその内臓の状態から夢の内容を説明している。

さらに、『素問・脈要精微論』篇と『靈樞・淫邪發夢』篇には、臓の気の過剰により夢が現れると論じている。

「肝気盛んなれば則ち夢に怒る。肺気盛んなれば則ち夢に恐懼・哭泣・飛揚す。心気盛んなれば則ち夢に善く笑い恐懼す。脾気盛んなれば則ち夢に歌樂し、身体重くて挙がらず。腎気盛んなれば則ち夢に腰脊兩解して属せず。」

即ち、五臓（心・肝・脾・肺・腎）の気が盛ん過ぎるとそれが夢に現れる。夢の内容は対応する五臓の状態によってそれぞれ異なる。

それに対して五臓の気が内に不足したり外に余分があったりする場合にも夢に現れると『靈枢・淫邪発夢』篇に論じている。

「厥気心に客すれば、則ち丘山煙火を夢む。肺に客すれば、則ち夢に飛揚し、金鉄の奇物を見る。肝に客すれば、則ち山林樹木を夢む。脾に客すれば、則ち丘陵・大澤・壊屋風雨を夢む。腎に客すれば、則ち淵に臨み、没して水中に居るを夢む。膀胱に客すれば、則ち夢に飛行す。胃に客すれば、則ち夢に飲食す。大腸に客すれば、則ち田野を夢む。小腸に客すれば、則ち聚邑衝衢（しゅうゆうしょうく）を夢む。胆に客すれば、則ち夢に鬪訟（とうしょう）して自ら刳（えぐ）る。陰器に客すれば、則ち夢に接内す。項に客すれば、則ち斬首を夢む。脛に客すれば、則ち夢に行走して前む能わず、及び深地窖苑（しんちこうえん）「奥深い苑林」の中に居る。股肱に客すれば、則ち夢に礼節拜起す。膀胱と直腸に客すれば、則ち夢に溲便す。」

「厥気」とは「外従り内を襲う」の「正邪」の気を指す<sup>8)</sup>。これらの気が臓腑の間を流れて行くと、臓腑に関する様々な病変の兆候を出現させ、それに応じた夢となって現れると認識している。

中国伝統医学では悪夢（驚き、恐ろしい、戦うような内容の夢を広く包括する）に対しては、しばしば特殊な意義を有すると考えている。臨床上、もし患者がたびたび悪夢を見る時、その原因が寝ている姿勢や激しい情緒変化あるいは過度の疲労等でない場合は、何らかの疾病の前兆であるかもしれないと考えて対応するのである<sup>7)</sup>。『黄帝内经』の中の『素問・脈要精微論』・『素問・方盛衰論』・『靈枢・淫邪発夢』などの篇に記載されている多くの淫邪発夢の内容を、我々は弁夢測病（夢を弁証して病気を推測する）の根拠としている。このような認識は臨床応用において極めて高い価値を有していると考えられる。

## VII. 結 語

以上、『黄帝内经』における夢理論・夢診断を概説した。『黄帝内经』の夢理論と夢診断は、現代医学の観点からみれば、甚だ幼稚な憶測にすぎず、これら多くの具体的な言葉はすでに過去のものである。しかし、この憶測の中で、少なくとも三つの点は、現在においてもなお科学的意義を持っていると思われる。第一は、睡眠中の外部的な刺激が夢を誘発するという点、第二は、睡眠中の夢の生成には一定の生理的要素があるということ、第三は、睡眠中にみる夢は人の精神がコントロールを失った状態の産物であること、である。『黄帝内经』の夢の内容は極めて豊富であり、また臨床とも密接な関係を有し、極めて実践的な意義を持っている。『黄帝内经』が挙げる夢の例は、現代の実験方法によって研究してみる価値があると思われる。従って我々は現代科学の方法を応用して、夢診断に対する発掘と整理を絶え間なく推進し、発展と向上を促進すべきである。

## 謝 辞

稿を終るにあたり、御指導をいただきました多留内科クリニックの多留淳文先生、本教室の牧角和宏先生に深謝いたします。

## 参考文献

- 1) 許慎撰・段玉裁：説文解字注。台北・天工書極（1987）
- 2) 南京中医学院編、石田秀実監訳：現代語訳・黄帝内経素問。東洋学術出版社（1993）
- 3) 島田 隆司：素問・靈枢。日本経絡学会（1992）
- 4) 清田 等訳：黄帝内経。四川科学技術出版社（1995）
- 5) 劉 文英著、湯浅邦弘訳：中国の夢診断。東方書店（1997）
- 6) 中医研究院／広東中医学院／成都中医学院著、中医学基本用語邦訳委員会訳：中国漢方医語辞典。中国漢方（1980）
- 7) 王米渠等著、小野正弘等訳：中医心理学。たにぐち書店（1995）
- 8) 丸山敏秋：黄帝内経と中国古代医学。東京美術（1987）